

**第10回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告
会報告要旨**

**「日本の原子力発電所の住民運動から
みた科学・技術と社会の間」**

似田貝 香門(NITAGAI KAMON)

東京大学名誉教授

東京大学被災地支援ネットワーク代表幹事

0. 自己紹介を兼ねて 阪神・淡路大震災・東日本大震災とボランティア活動

1) 新しい支援の論理の誕生

阪神・淡路大震災（1995年）のボランティア活動は、167万人（平成9年5月31日現在）もの多数のボランティア活動と、文字通り、被災者の〈生〉の緊急支援と、被災者の自立支援について、生活や地域という場所に根づく支援の実践として、社会に大きなインパクトを与えた

支援者（ボランティア）とは； 阪神・淡路大震災で出現した新しい支援の論理

《支援者の実践語》

「ひとりの人として救う」

「その人らしいケアの本質を見ていくこと」

「最後まで生ききること」

「自分らしく生きる」

「最後の一人まで見捨てない」

「一人の人としてのいのちを重んじる」

「その人のために」

「ただ1人のために」

2) 〈生の固有性〉へ向き合い

一人の「ひと」として「いのち」を大切に

〈生の固有性〉へ向き合う

→支援活動に強かに伝わってくるのは、強烈な、生命こそ人間を人間ならしめるもの、という個々の被災者のもつ1回きりの「いのち」への支援、

あるいは個々の人の歩んできた 《生》 への支援への 〈こだわり〉

* 〈こだわり〉とは

〈生の固有性〉への支援という視点；〈こだわり〉とは

「いのち」こそ人間を人間ならしめるもの、という個々の被災者のもつ1回きりの「いのち」への支援、あるいは個々の人の歩んできた《生》への支援へ

「最も弱い者への配慮」→「出会う」

→「ふれあい」→「今あることに全力を尽くす」という実践の
継起性

こだわりとは、〈約束・関与＝責任engagement〉

* engagement ; J. P. Sartre (責任看取 似田貝訳)

対象に関わる。そこで起きる事態に「こだわる」。研究者として、
人間としての応答責任。

2. 現代科学・技術と社会

1) 危機と人類の生存

- 日本及び世界は人類の生存を脅かす危機が迫っている。
- 「リーマンショック」(2008年)に端を発する「金融危機」(100年に一度)や、経済危機、核の危機、気候変動など、地球の危機を真剣に考え、管理しなければならない問題を抱えている。それらの問題は、人類の生存にかかわる。
- 阪神・淡路大震災(1995)から、中越沖、東日本大震災(2011年 1000年に一度)へと続く自然災害。とりわけ、原子力発電所等をめぐる問題は、極めて大きな爪痕を残した。

2) 生き残るためのテーマ；生命、自立、共生

- これらによって、生活の場たる市民社会、地域社会の脆弱性＝危機を一層深めた。
- このような状況の中で、社会科学・人間学のマクロなテーマは、**生命、環境、情報、自立、共生**といった軸からなる。とりわけ**基礎的な問題**としては、**生命（いのち）、自立、共生（支えあい、わかちあい）**である。

3) 危機回避の「救済論」； 《科学・技術》という考え方

- 危機に対応し、科学・技術を中心とした「**持続的可能性**」（**サステイナビリティ**）という考え方がこの十年ぐらい、社会にも定着している。
- この「**持続的可能性**」という概念やテーマの背景は、「**危機**」への対応。

(1) 「サステナビリティ」(持続可能性)なる概念の背後のある時代状況

- 「サステナビリティ」なる用語の出現は、何よりも
- **現代人間社会の複数の危機的様相を鋭く反映したもの**
- それは以下 3 点に要約される。

第1に、生態系の危機

- 経済発展の前提となる地球の諸資源の枯渇をいかに回避するか
- 「サステナビリティ」（持続可能性）という考え方は、この**危機回避の、生態系－生命系の危機の問題へ拡大・延長し、逆にその視点から、展開された。**
- 資源の管理や科学技術の対応に基づいて「**経済持続の可能性**」を追求するというテーマの暗黙の限定
- 自然環境それ自体の「**安定的存続**」において「**人間が何を為すべきか**」という問題の位相へ転化（根拠付け）。

第2 あらゆる「知」の形態の危機

- 「危機」の諸位相は、人間存在の危機、政治、経済、社会、生態系、地球環境等危機とそれらの現れ方は差異があり（独自のであり）、また相互に浸透し合う事によって、**複合的な危機**の様相となっている。
- 「サステナビリティ」（持続的可能性）なる考え方は、こうした**危機回避プログラムないし救済プログラム**の一つと考えられよう。
- かつては、**危機＝終末eschaton**は、宗教や信仰のテーマであった。
- 近代社会は精神的危機を、社会思想的（宗教思想的）には、ユダヤ＝キリスト教的終末eschaton〔**終末論（eschatology）**〕と救済salvation〔**救済論soteriology**〕の「世俗化」として捉えてきた。

第3 現実の危機

- 3.11前後の日本社会や世界は、人類史に関わる深い危機の様相
9.11以後の国際政治は近代が自明なものとしてきた戦争とテロとの境界線や国民と難民との区別をあいまいにし、
- 100年に一度の**金融危機（経済危機）**の世界連鎖や、1000年に一度の史上最大の**震災と深刻化してしまった原発事故の複合**は、これまでの「サステナビリティ」の捉え方を大きく揺るがしつつある。
- あらためて私たちが生きる世界の作り直し、再デザインが緊要なテーマとなってきたのである。
- 「持続性」という概念の現出は「危機」に根ざしている。**希望・願い**

「救済」プログラムと「進歩思想」

- この危機を乗り越えようとして、あるいは回避するプログラムとして、科学・技術の力に期待し、
- またこの危機を乗り越えるべき市民道徳として、「持続的可能性」に関する教育が重視される。
- 社会思想や宗教思想の領域で、こうした対応を捉えると、科学・技術が、人類の「危機」（終末eschaton）の「救済」プログラムとして現れる（進歩思想）、とみなされる。
- 科学・技術という非神学的、非宗教的領域が、救済salvationの中心になっている。
- あらゆる問題が解決可能だと考える価値観。

自然との関わりと自然への挑発 1) 自然との関わり

- 17世紀以来の「科学革命」以来、近代科学・技術が関心を示したのは、客観性、論理性、普遍性という原理や理論
- そして今や、近現代の科学技術の発展とともに、環境の範囲が拡大され、今や地球規模にまで及んでいる。

「参考」；ハイデガー (Martin Heidegger) の「テクニク論」 (1955)

テクネーの2つの意味

- 1) 「出で来たらすこと」 (ポイエシース；創る) 自然もまたポイエシース
- 2) 「認識し開明すること」 (アレティア；覆いをとる、真理)

つまり、〈露わに発〔あば〕く〉

→ 可能的なものを現実化すること

自然との関わりと自然への挑発 2) 自然への挑発

2の「露わに発く」はやがて、自然とのひととの媒介であった、科学技術の発展によって、さまざまな形態を生み出す。

- 自然への挑発、引き渡し
- 開発・変形・貯蓄・分配・転換は「露わに発く」の諸形態
- →この結果、自然界には決して存在しないもの、結集して
いないもの、異なる運動法則や時間を持つ要素、素材、仕組
みの生産と拡大
- →公害問題、原子力の利用等の問題を引き起こす

3.原子力発電所立地反対運動からの問題点

- フクシマにみられる問題を、かつて調査研究した東北電力福島発電所立地反対運動と新潟県巻町（現新潟市）の立地反対運動の住民投票から、科学・技術と社会との関わりからどのように考えるか、を以下論ずる。

- ・ 事業として決定（手続きと、科学・技術以外の複合的領域による実行組織；立法・行政・電力会社）
- ・ **住民の意思と議会・首長とのズレ**（議会制民主主義および代表性の限界点と住民投票）
- ・ 科学技術を理解させるという姿勢（説得型；専門知と説明責任）
専門権力の自己check機能をさす
- ・ 科学・技術のリテラシー
読み書きの能力、基礎的な素養。科学技術リテラシーとは科学技術に関する基礎的な素養
- ・ 合意形成〔論〕
予定調和；理想論と現実 表現と反映→現実が多様な意見の分布)
- ・ **科学・技術の実装部分と生活者の間のコミュニケーション構造が成り立っていない**

新潟県巻町（現新潟市）の原発反対住民投票での論点

- 巻町；
- 人口約3万人の穀倉地帯（新潟県西蒲原）とベット・タウン化した小さな町（巻町）での、27年間の巻原発建設計画反対運動の展開と、**住民の意思を住民投票で確認**しようとした住民運動の〈歴史的行為〉を、〈住民の意思決定の危機と回復〉というテーマ

運動の成功の要因

1) 阪神大震災のインパクト

2) 原発建設への公的「手続き」の急速な展開による、一般住民の「首まで水がつかって来た」という危機意識。今からでも遅くないのではないか。

3) これまでの地域政治（選挙）では、原発問題は「政争の具」でしかなく、決して、住民の意思（民意）を吸収したのではなく、

住民投票こそ住民意思の最終確認の行為、と理解。

〔〈沈黙性—匿名性〉の政治からの脱却〕

- この地域の政治（選挙）では、〈原発建設問題〉は争点とならない。政治は地域の〔地縁・血縁・金〕の利害関係や社会関係の古い構造を反映している
- このような古い地域政治の構造の只中で、運動を持続・継続していくには、**政治メカニズムからの〈切断〉**が必要。
- 運動の、保革の政治イデオロギー的枠組みからの、意識的脱却の戦略転換。
- 〔第Ⅱ期の住民運動の組織特徴 —生活者としての運動志向。わかりやすい運動〕

〈沈黙性〉の中での住民の意思の集約方法の検討。沈黙と匿名に対しては、「本音の声」が住民意思

こうした声を数的に結集するにはどうしたらよいか、という運動戦略。それが住民投票という集合行為を生み出す

自主管理住民投票；自己表明する《声》

- 自主管理住民投票は、この地域ではじめて〈沈黙性—匿名性〉から一歩前へ出て
- 自己の意思を他者の眼差し中でも、表示
- 〈匿名性〉を吸収する運動から、住民の意思を自己表現する政治や運動へと展開できる可能性
- 旧い行政補完組織としての区長会の力の弱体化と区長会の変化
- 家族の中の意見の異存

〈歴史的行為〉としての住民投票 住民の意思表示の回復の理論的根拠

- 30年間（1965年～1996）の諸住民運動の「時空合一」。

すべての諸運動の集合行為が、96年8月4日の住民投票で表現される。

- 諸運動はその行為に向かって再定義され、新たに位置づけられ、意味つけられ、価値つけられ、出現する。

歴史的に凝縮された集合行為。

- **住民意思の回復の理論的根拠＝住民投票をめぐる民意**
- 〈原発問題〉については、住民の意思・民意と首長・議会の判断がズレている。
- 民意を議会は代表representationしていない。
- **間接民主主義（代表性）が機能しないときには、民主主義の本来の原則たる直接民主主義（住民投票）によるべき、という発想。**
- 議会制民主主義の機能不全に対する〈強制修正〉としての直接民主主義の適用。

- ・ 科学技術を理解させるという姿勢（説得型；専門知と説明責任）

専門権力の自己check機能をさす

- ・ 科学・技術のリテラシー

読み書きの能力、基礎的な素養。科学技術リテラシーとは科学技術に関する基礎的な素養

- ・ 合意形成〔論〕

（予定調和；理想論と現実 表現と反映 →現実には多様な意見の分布）

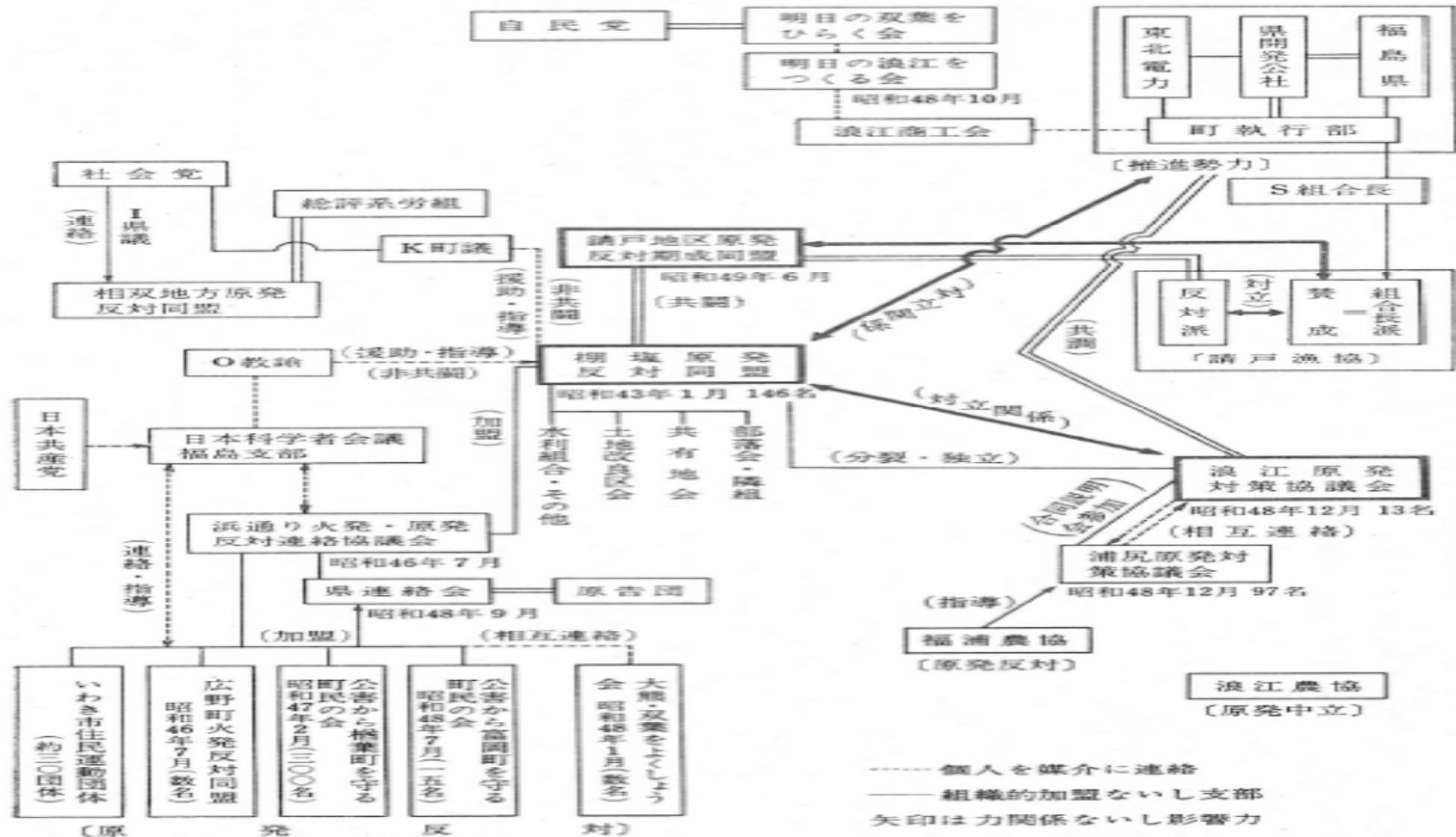
- ・ 科学・技術の実装部分と生活者の間のコミュニケーション構造が成り立っていない

「具体的な問題」の「知識の共有と相互理解」によって、「豊富な全体がみえてくるような、整序の仕方を人々と共有」しなければならない。

根っ子のことば理解・了解があって意思疎通可能。

「**言葉行為**」 parole は、**主体の自律的行為**であり、この行為を出来事（社会事象）のひとつと考えることによって、社会に関する開かれた表現として位置づけることが大切である。

第1図 福島県浪江町東北電力浪江原発に関する組織関連図



日常言語としての水、土地

「日常としての住民運動」 (似田貝香門,1974『展望』5月号 筑摩書房)

- ある時人は、**土地** (農地) がじいちゃんから孫までの世代的繋がりを持つもの、水利慣行によって部落の土地 (農地) に水が流れてくる、という**歴史的共時性と共同性の織りなしたところに位置**することを知る。この織りなしが、近代的な土地の私有形態として金銭と交換される対象物として特化され限定させて行くのが「権力」である、ことを知るにいたる。
- 「人々は、自己の生活が危機的状况に追い込まれるとき、かえって**自己の日常生活を対自化する**」 (p53) 「惰性的にすごしてきた自己の生活の意味の再発見」 (p53)
- **発話 ; ことば**

《科学・技術を人間の手に取り戻すにはどうすればよいか》 ; 宮沢賢治の「グスコーブドリの伝記」

- 科学 ; 「自然をより良く知りたい」という人間の探究心、好奇心に根ざした営みが原型。
「自然をよく知ることによって、自然とよい関係になりたい」という素朴な気持ち。
- 近代の科学 ; 知識を拡大する、知識欲を充たすという方向に展開。そしてそれを産業が利用する。「自然を利用する」という方向へ展開。
- 科学・技術 ; 現代の科学はその成果を産業に適用、「科学・技術」の巨大化、極限化
- ときにそれらは、ひとりひとりの人間にとって、脅威であり、抑圧であったりする。
- そして一般の、風通に普通に生きる市民にとっては、科学・技術は遠いところにあるもの。
- 人間の顔をしていない、という印象。
 - * * 羅須地人協会（1926年）の拠点で、自ら農地を耕し、農民と共にあろうとした時期（賢治29才）
 - ** 「雨二モマケズ」が手帳に書いた年。

- 60年代後半、私は大学院生で、公害問題と住民運動の研究を始めたとき、科学者のそして技術者の社会的役割は何か、が鋭く問われている時でした。

「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を われわれの者に出来るのか」 「グスコブドリの伝記」

- この作品の主題は科学・技術をいかに農民のために、ひいては人びとの暮らしのなかに真に役立たせるにはどうすべきか。
- この作品では、**専門性と市民性、専門家と市民という対立軸、別ない方をすれ、科学（普遍性）と直感（現場性、人間性）と「いのち」。**
- 矛盾ともいえる対立の只中に、そうしたるつぼのなかに、「われわれのに必要な科学」を考える。
- あるいはそれを求めなければならない、宮沢賢治はそのように言いたかったのでしょうか。

《作品に登場する3人》

- クーボー大博士；科学者

科学はなんのためにという方向づけ。「われわれに必要な科学は何であり、何に関心を持たねばならないか」という方向づけ

- ペンネンナム技師；技術者

独りよがりでない、きちんとした科学的知見に基づく、具体的な方法の提示

- ブドリ；市民性と感受性sensibiliteをもつ人間

世の中のため、人びとのため働く。

- 方向付けが正しくなされ、それを実施する専門性が備わっただけでは不十分。血の通った人間のものになるためには、実際にひととして生きる場の感性ともいうべきものが加わる必要がある。

- これらが充たされて、はじめて科学は「われわれのもの」になる。ここに科学の希望がある。

•

《雨ニモマケズ ナミダとオロオロ》；原点はここにある

- 科学は「われわれのもの」になる。ここに科学の希望がある。
- このような科学はどこから始められるのか。関心の方向付けはどこからくみ取るのか。
- この問いの回答は、賢治の「雨ニモマケズ」に書かれている。
- 雨ニモマケズ
- 風ニモマケズ
- 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
-
- 感動的なのは以下の2行
- ヒデリノトキハナミダウヰナガシ
- サムサトノトキハオロオロアルキ

残された課題

- 一定の時間に従う変化（発展）が長時間にわたって続くためには、危機時にあって、社会の諸領域に「存すべき秩序」を自己形成する能力がもともと備わっていないのではないのか。それは何か。
- → 社会形成とは、動的秩序を自ら創り出す能力。この形成力の核心は何か
- → 人文知では、このような考え方は、何よりも、「ことば」による知を、とりわけ危機に直面したとき、〈そのつと〉、新たな価値を付加しながら取捨選択をして、後世へ《伝える力》が不可欠

ブリコラージュ Bricolage (Claude Lévi-Strauss)

具体の科学、等身大の技術。

この概念の注目点

- ・ハイディガーの言う意味で「自然を挑発して立たせる」ことが行われぬ。

つまり、人間自身が、自然のエネルギーを持ち出すように挑発されていない状態。

いま私たちに求められているのは、コントロールなき増大が、地球の生態系のみならず、人類の神経系をも破壊する事を見極める**想像力**であろう